語林類葉

わゐゑを　廿

畢

ホ2
502
20上

門 和 502 20

（朱印）

語林類葉巻之二十

清水濱臣輯

和行 わの部

二言

わか　若君ノ畧

きのもと下　わかをもさしみるはしりなきて。

和哥

源 玉かつら　ちのわかいつらし侍つるほとにあやしきへいのあら

○金葉　○拾遺賀　坂上のこれのり

ともわかなつらしきゆりのはらに〇菜花はなくくへ　為政
かな序ともかくをゑて法つしきかな〇今昔廿四卅一　和哥
読共ニ哥読セテ書セツルヲ
新古雑上　西行法師
ふかの浦に家の風こそふきつたへ渡つくしき六月ふるえの
異本能宣集和歌合恵

らけ

堤中納言　二帖　髪のきよらにつきいみしうみて
きよらけいまとて〇濱主四らけめんさしかひの
きハはたにいうなる法てめてなきを

畳
タヽミ丨
帖丨
一尺丨
調丨
庸丨
積丨

某綿

空穂　古おきつき風　かゝのあけあかかり　あかりかり　きこえみえて
の雪のふりみゆるからめのかゝ人あかりもりのき右百
枚えりいましてノ〇類史卅二帝王部十二天皇遊猟
延暦十五年正月癸巳遊猟垂勤野賜四位以上
衣五位帖綿〇綿種一音語イ部絃琴条〇大安寺資財帳
畳綿三牒〇逸史九引類史百九十九殊俗部崑
崙延暦十九年四月庚辰以流来崑崙人所責綿
種賜紀伊淡路阿波讃岐伊豫土左及太宰府等

諸国殖之其法先簡陽地沃壌堀之作穴深一寸衆穴相去四尺乃洗種漬之令經一宿明旦殖之一穴四枚以土掩之以手按之毎旦水灌常令潤澤待生芸之○逸史十一引類史百八十六佛道部十三施物僧各絁一尺綿十屯○同十四引類史卅四延暦廿四年正月云々又別収調綿百五十斤○今昔廿六大八畳綿百両○江次第二孟旬宮掌令積綿抄云令棄庭積綿内藏准之

三言

こゝ死

愚管抄六 中納言にて若死にして

こゞゆ 縮

枕草子三 西 浄土寺の前の関白にてこゞゆみちたん はしさへ○大和 きゝしれる人もきこしめしたらんこゞえて

つゝみてり○

和琴

康富記文安六年九月十七日大炊御門殿被御

云和琴天照大神岩戸ヲ出給候砌神楽器也弓六
張並テ弾之依之有六絃 云々 ○長明無名抄上 和琴

のおもり 新六 衣笠内大臣
茂くさは朱のまかきしつたにかゝりてなる萩かれさの花

○

わたこ 綿子

玉勝間 童蒙抄にあなひのつくしのこさハ此家の米
つくしのこのかほのそくとときわたのとしつて
なりわひて萬いきりし 本居云 今世のわたこ
のきぬ成るへし

わりご

宇治拾遺 同 わりごに酒さへつけ○今昔廿四 廿八
此中将ガ所ニ大破子ト云物ヲシテ奉ケルニ
子目シタル所ニ此ク書付タリ○同廿一 八 餌
袋破子酒ナトモタモ○同 同九 大破子ノ多ク
入ケレハ師ノ僧正破子此荷許謂ヘテ○夫木
廿七 家集祭主輔親
伊勢海にさきの海より見わたせはかのきのこもわりこはかり
けふハ松のうらしまこのわりこをみるは主輔親 和歌式頭に

かくてくほにて かものはしをすきて ゆふさるまてあそひ 和泉

式部

いろこのみなるの名きこえありける人につかはしける あふき

○源 和泉 別れしもさらぬわかれにさはりあるへし ○ 雲州

往来可被労給大破子し

ことにて

金葉恋下 蔵人にて侍りける時内をわりなくいてゝ女の

もとにまかりてよめる 永実

三日月のおほろけならぬ恋しさにわれてそいつる雲のうへより

○伊物 常徳院

ゆゑもなくあはれかりける 陸奥のくにゝありけん人をかそへ

ことはし

我也○なのみし一人にあらなくに 御傍の字の意にいふに

古今長哥 伊勢 あふさかのいつのことよりかたらひてのちの

ことはしめて○貫之大井川序 ことはしくらきものゝ

拾遺雑下 ことはし

もしほやくけふりのたなひくかたよりいてゝつはいまもなかめん

○後拾遺序 ことはりとけるもことはりて ○ 落く

ほ四 十三 ことはりにまかせてゆくも大事のさはりく○

若親（ワカオヤ）

うつほ 藤原 わかおやもいまだあらはれぬに 産婦ヲ云 母宮ニムカヘテ○若親ト云

わかづき 若附

菓苑 嵐山 古今 かくをかりうつくしうみえてあらくてわか

つきしなかへきへとも

若黨

雲井物語 門出に若黨と見えて○布衣記

わかえ 若蘖

菓苑 若枝 手をつけしつるきのわかえをおもひなへるきのみそうき

○

わか緒 放縦

続世継 わかききの世から ちりおもひわか緒のみだれて

ひらくしきこえし 緒ひらけも○菓苑 玉のうきうちめく

わか緒にみうきあて○

らくさて

宇津保 藤原 らう中将のあそんをまうのこと〳〵とききて

これなんらくさてなしらうあんなし。

らけざし

栄花 衣珠 法ほうしあらけさしらけがひとを笠もあまたし

紫ゐてつうえいつけて。同 烟陵 あまの上達部

ハ香爐を香葉の枝につけあへ御ふくへいらけさら

れり。

らさうく 童謡

盛衰記十揭ハ何揭国王ノ揭八重ノ塩路ノ波

ノ寄揭 安徳帝御誕生ノ時ノ童謡

らさき子 未詳

万代恋二 基俊 あかさいかる也ましわわすらさき子かかくの身をよしうらくき

〇

らざし 更

東鑑七但態々不及被相尋事也

わすれを 忘緒

経亮云半臂今ハ装束家ニ着セヤウノ傳アリテ大緒ヲハ忘緒ト云テコシニハサミ別ニ小緒ニテ結フヿニナリタレ𪜈台記康治二年四月廿五日中略半臂伊通曰正儀只以大緒結之何可具小緒哉余曰諾自今以後不可具小緒○假字装束抄頭書基量卿云忘緒事見永𣎆記廣三寸五分長一丈二尺年少又可了簡帯長可従腰是ヲ引帯ト云忘緒ノタヽミヤウアリ二ツニ折テワナノ方ヲ三分一程ニ折テ又其中ヲ引帯ニテ結○台記ニ久安五年十月十一日吉行幸也二位中将中略半臂如下襲面身有裏其色如面襴忘緒等無裏黄織表袴紫折枝九文裏如常云々

綿衣（ワタキヌ）

東鑑卅四廿二若君即着袴ノ条其後着始綿衣給云々○今昔十九十三条我カ着タル綿衣ヲ取セテケリ

わたゝめ

菜花 玉葉 らうらうらの照してみんのみえそし

このしきあめて○伊勢集 ぱんなうりは記んりしおさうらと

のにきかふ○

わたなれ 踏歌のさきし

花鳥 わたみて花をつくりかざしのやうにおもしきさ

○源 竹川 めはひもれくみゆるしきここ花もうきは

人かしにてなくるかまして○

わたまし ワタリイマシノ約

中務日記 その日ときた井さのいけをみの入にくわたまし○室積 おめ 祭使 きやうとまほへきんつくはせ

しかたる人○唐鏡 そのころわたましの程

わたらせ 渡瀬 ○わたるせ ちとらいえは

後撰秋上 家隆兼三 七夕もあかるをありくあまの川このわたらせにわたるせもなし

○拾遺恋一 重出 中務日記 川きりにみちてそこをふ少年のわたりてふつくりわたせかん

ワタセ

○

わなゝく

わなゝく 戦慄ノ貌

今物語 おそろしけに思ひしられしとふるひわなゝきけるを

わびしう 侘哥

竹取 わひしくおもひて つらきほとにおもひわびし

わきて

保憲女集

山人のまゆしもさむくきえかへりほにいてぬれておもひきえなん

○

わらは名 幼名

栄花 月宴 さるへきかたちいとをかしけなるわらは名ともさき みさきなとえらはれ○

わらふた

和名抄

七枚と東のわくしるけ○

○尚歯會記 簍のわらふた

わらゝか

狭衣一上 卅九 ○源上 若菜 うちまきいそぐかれ○ 細 和之

あいきやうつきたるし

うちとけ

王勝間十二 とし つ子 内容 安濃津の芝原春房 かり

いうらい 中略 海の藻の中に酒ちりて あつかう藻の香の

あう虫 云々

うちはへ

源 梅枝 自讃 河海

うちはへてとしのふ○

五言

うちさわり 若盛

落書露顕序 あらさわりたりわ極の云々いかれ人云々○

うちまきひとの 万代集五 権大納言公国

うちしめり

ワタリモリ

万十

六帖

人九集

ゑらしめらるや私かくも一ちせふみるゝひきまは既罪なるへきなりに

渡物（ワタリモノ）　今云子リモノ也

東鑑卅二嘉禎四年八月十九日今日御奥祭也将軍家於今出川殿御見物間渡物風流結構異例云云○盛衰記四十三其額書ニ日日吉社ニテ臨時ノ祭ヲ居（スヱ）百番ノ御子ノ渡物百番ノ一ツ物百番ノ流鏑馬百番ノ競馬百番ノ相撲○増鏡老ノ限九月の御花めハ新院さくゑらりかしまへなし○

ゑらまけて

源朝良　ちひさきはゑらまけてゑらちひきしるに○

笑花　○竹取　中納言はゑらまけ

あらゑましてやむをとくすきるせしらしおひりれと○

ゑらゑまゑ　笑

四季物語　正月　神の侍く佳のふりをゑるをふく傍も

あそんもゑらゑましきものにし○盛衰記十一説法

ヱスマシタリト咲ツヿ思ハレケル○大鏡二

こひあそひたかはわれたちもかくこともみしられかう○

こゑしもかう

狭衣三
武蔵野の霜かれにみしくれなゐの秋しもかくしもまたほのかう

夫木卅六 久安百首 季通
野分してこよひ人もなかりきねこれもうしちやうら荻のむきのをとくさ

久安百首秋 安芸
ねけやれけをもみちれ紅葉のきりしくほうれとうらいそ秋は惜みれ

○

六言

こきとりきて ホコリカナルサマ也

今昔廿 廿五 脇ヲ掻テ扇ヲ高ク仕テ嗔テ云○同廿三 陸奥云々条 脛ヲ掻キ指ヲ巻テ○同廿三 相撲脛ヲカキテ已カ蹴テシニハ生カシ○

こそしもの

源 ○同 東屋 こそしもの

にそひうしの御しを○華荘 月宴 十一才 みことものか

こそしものみそうみしらうそひゆそかへる

こちあそひ

源俊
清こ〳〵ハあそひにこそ作れ〳〵こ〳〵世の中こゝハ
竹馬を杖にもけふハたのむかなわらハあそひを思ひ出つゝ 山家集 夫木廿七

こともまけいろ
源義 こともハ人をおもひいつれも

こともすまひ 童相撲
三代實録云貞觀三年六月廿八日辛未天皇御
前殿觀童相撲先是近臣分頭相折各為左右云〻

○廿九日壬申晦云〻○同四年秋七月五日壬
申云〻○六日癸酉云〻○同五年秋七月八日
戊戌云〻○

こわハきらく 我ハ気色ヽ自慢ヽ
長明無名抄上 こ〳〵ハきらくしなる家とこそなれ
也○

七言

こわかおひすかた 若生姿

○ 隆信集恋四 あめふるゝおもひそへてはきみこひしかりけれハ

こりもこりすと
万代恋一 年をへてこりすまに（こりすまにとしもへぬれは）なみのしつくにこかるゝあまのなほ浦波も
古今恋三 こりすまに人にくからぬ世にしすまへは
大かたハこりすまにこりぬへきそんなとをたへぬみるめかなしき
袖中二

こきしくとこそは
今昔十九 条十一 西ニ向テ行クニ喬（ソハ）卒爾ヲ不見

八言
うきあけのころも
和名鈔被○宇知加介 吹上中 うきあけのあときこえ河
うちみ○同 同 うきあけのきぬきぬみの人を

○

ゐの部

二言

ゐく　居田 見

夫木七　五社百首　俊成卿

かるもかくゐなのみなとにをちこちにあさりのいさりふねさしいてつつあまのはつふね(?)

○

ゐと　井所

わくらのゐと　　　　座標

夫木廿三　江の五月雨を　右近中将基氏　　　　大和

さみたれくみえぬうきて波越ていり江のもとにたつ舟(?)らん

　　　　　　　　　枕冊子 巻八

○

ゐやまふ
ゐやまう
ゐやゝし

ゐや
土佐日記 家の人の出入にくからずゐやゝかなり〇

三言

居飼
増鏡 異本北野雪 居飼御厩舎人ともにかしこまり
めきたり〇同 烟末こ 御随身居飼御厩舎人とも
いろにせんといろしとつゝ〇東鑑廿三 十一 居飼
四人 二行 御厩舎人四人 二行 一員 一行 〇同廿四

一 居飼四人 二行

ゐるひ 堰桭
中務日記 ゐはをやゐるひのつかひ栄花のきしをとらえていつきみん
〇日本紀 〇古事記 〇字鏡 拭

ゐぶけ 居長
老のひ結上 ゐそけのはらめのくしく〇栄花 根合
しはきめのまきん人のゐそけあかにみちてゐて
侍子のおほしかのはりまきんい〇字鏡 吹上 中 ゐ女

廿三天ちかりの月の錦にもぬ〇濱松四　ゐなか
のはらに清らしく濡れつゝまて

ゐまち
源　少女　ゐまちいそきたるひしものを

ゐなり　居形〇モトノマヽニテ居ル事也
いさゝれは花もさきみにあるなり風はゐなりに吹よるまてと
〇　移ろふさくいひけし〇
り俄まなりてり

四言

ゐかくれ　居隠
宇津保　藤開　うへのおしあれさき所やあしく所とそ
女御の君ふゐかくれたへは〇

ゐまとひ
枕冊子　廿八段　うしとらの隅の欄にそうえきまつきたるや
いみるとまとひに御前のうへにもあらひる

居所

頼政集
雪ふれは何にかは身をかくへきかゝるも下のゐなかは

ゐなかり
宇津保 藤英 みかとの御つかひにおはしかりてゐなかり
ゐなかへ

ゐのとき 人定 ゐのとき 紀
万
後撰秋中 ちかき人しれ
秋のよはいたくふけぬとゐのときまてねられぬ
〇伊勢物語 六十九段 女人をしつめてねつるほとに

ゐ渡しる
玉葉三 せちにおほえける女のもとへゐ渡しるとて侍るに

ゐなく
今昔廿八 卅八 ロタニ井リメリ程ニ 〇 ノハ ミル トニ 云 程ノ
ゐノ誤字ニ
ヤ可考

五言

ゐ候の時 亥子時

源 浮舟 夕川より出させ給ひし時にはか
もしはしつきめんさてあるつまにおそうつせなき也○

みめくち
和名抄 夫木廿七 梧子鳥
はしこみる みそくつちからちひみきもかなし 仲正 読人不知も
○

みんなうき
源 花宴 ○同 浮舟 ○同 東屋 ○同 柏木 ○同 少女

○同 梅枝
六言
みつぎの命婦
大和

ゐなかうとはし
盛衰記 十年々出仕シ給テ田舎忘アルヘシト
宣ケレハ○

ゑの部

一言

ゑ　繪

源　絵合　そのかゝるゑはそれくらへて　○同　同　絵の

月並のゑもこれまた書もこれもと書つけて　○　手習　十二月

の絵し　一　勘　年中行事絵し

拾玉集異本　らのへしやさしくふる清きのおほろも秋の花みて

夫木二　清輔　納ら御所のあたりに立てかさ絵にてともの旅人

同　土御門内大臣　花さかせ待てとをゝなり表のかけてまくらかける

○赤染集二　絵　地獄　○金葉雑下　の絵　地獄　○　藻塩　すくの　まつく

物語ー
月並のー
下ー
きみー
地獄ー
ー師
男ー
四季ー
紙ー
かくーー
女ー
似ー
蚕ー

屏風ー
和ー
燒ー
泥ー
火筆ー
火繡ー
白ー
合戰ー

あやのめんにゑかきをてし○同 衣珠 ゑかきして○
かきゑ 墨花 根合 八丁十四丁 ○墨花 根合 男絵にかきゑしたり
かしらかきせさふ○源 絵合 あかうりゑはゑ絵なかつ
かしきゑるゑとゑ○同 にほ人の絵もいまくの上手と
もの 月次 絵 八丁 ○同かしゑいかきうわして○ゑゝ絵 墨花
根合 廿一丁 ○同 同 この題のんくくとさまに絵女絵ともかき
あるに○古今著聞集後鳥羽院御時似絵を清
好ありけれは北面下臈清法師なとの影を大
ま信実朝臣をゑしてうつさせける○今物語やき
ゑとめてたくゑるらしゆえりれは○東鑑卅四仁治

二年十一月廿七日當將軍家御眼関東射手似
繪可被図之由有其沙汰今日以評定之次先證
其人數○今昔廿四 卅一 蛮繪ニ莅タル硯ノ管ノ
蓋ニ清気ナル蒔様ヲ數テ○同 同廿八 此中將屏
風画ニ遥ニ沖ニ出タル釣舟ヲ書タル所ヲ見
テ○盛衰記一 七丁 畫図ノ障子ニ百詠ノ心ヲ
繪ニ書セ玉ヒテヤカテ一華ニ色紙形ノ銘ヲ
モ書玉ヒタリケリ○今昔卅一 四 堂ノ後ニ有
ケル壁板ニ徒世ケルヽヽニ地獄ノ繪ヲナム
書タリケル 中略 此廣高カ書タル障紙ノ屏風

ノ繪ナト可然所ニ有リ○貞丈云和繪ト申候
ハ唐繪ト申ニ對シテ申候唐繪ハ孔雀鳳凰獅
子虎鸚鵡ナトノ類唐花ナトスヘテ唐メキタ
ル物ヲ画キ候ヲ申候和繪ト申候ハ梅櫻柳杜
若撫子鶯燕ナトノ類和哥ナトニ詠シ候類ノ
物ヲ画キ候ヲ申候○盛衰記四十三十三束二
状ノ白箆ニ山鳥ノ尾ヲ以テ矯タリケル羽本
一寸ハカリ置テ三浦小太郎義盛ト燒繪シタ
リケルヲ○拾遺秋扇義之の家ゐち繪に秋の
月おもしろき池ある家ある所 絹画に對してなく ○江次第

一 廿五　蜜繪　○
夫木卅六 もろしんみきりしろは四季の繪かきしもわをこひけるに 画法
○増鏡 老浪 人の國より女の本をとり好みかけるを
の似繪をせられけるに父の弟ゆかほせられける○新
勅撰泥繪屏風石清水臨時祭 定家 ○今昔卅一
五 蜜繪着タル童ノ髻結タル二ツノ船ニ乗セ
テ○茶餘客話云松江火筆画○蔣心餘忠雅堂
集有刻景韓火繪画歌其詩云 朱菴墨談ニ ノセタリ○濱
松三人のえる繪ものかうけられるに○増鏡 雪 さの
あろ繪の女房人の屏風あてころして○中右記寛

治八年八月十九日賀陽院哥合 中略 和哥書物
巻文各五巻 春夏秋冬祝各一巻瑠璃軸色々之 色紙下絵左方女絵右方男絵皆書
哥情欲美麗 過差無極 ○枕冊子 廿段 心ゆくもの よくかきたる
女絵の詞 ○同 四十三段 御仏名のあしたに地獄絵の御屏
風取渡して ○栄花 さまさまの悦 十二月十九日に御仏
名にて地獄絵の御屏風取出して
させ給ふ ○東鑑 卅六 卅一 寛元三年十月十一日日来
於京都以平将門合戦状被令畫図之去夕参着之
間今日於将軍御方大殿覧之教隆読申其詞事
終有御酒宴 ○同十九 廿四 康元四年十一月廿三日

奥刕十二年合戦絵自京都被召下之今日御覧
仲業依仰読申其詞 云々 ○同廿十丁 建暦二年
十一月八日 上略 廣元朝臣献覧絵者図小野小
町一期盛衰事朝光ヵ今絵着吾朝四大師傳也数
巻之中此両部類及御自愛 下略 ○同廿一 七 建
暦三年三月廿八日長定朝臣献絵二十箇巻 納蒔
絵古今以下三代集中撰女房作者取其詠哥並
挃 事書之意図之将軍家甚御入興 云々 ○新後撰 釈教
美福門院に極楽六時讃を絵にうつさせられて
へき所つゝはつまりかに

法事丨
維广丨
万燈丨
長講丨
龍花丨

十二ウ

某會

万代雜一　後白河院法華會にまゐりてよみ侍りける　平康頼
○千雜上　僧都光覚法華會の講師にて○玄旨云
此維摩會ハ興福寺にて毎年十月十日より十六日
迄ておこなはるゝ○菜花　御着裳　ハ月十日迄時堂に
万燈會せらるゝ也○長講丨政事要略廿五云嘉和
十三年歳次丙寅故太政大臣贈正一位美濃忠
仁公良房奉為先考冬嗣先妣忌日於興福寺始
修長講會也○菜花ハ三月　又万燈會行はるゝ也

水鏡下　桓武　延暦廿一年正月十九日よりの御の
ら高雄の法花會をおこなはしめ給ふ○東鑑四
十　廿八　鶴岡別當法印隆弁上洛園城寺興隆並
執行龍花會○続後拾雜中　叡山の六月會の
勅使に二たびのぼりて坊の柱に書付ける　光俊
あひにあふ年のいとせ無ふるきを二たびまでの志るしとぞ
○

二言

繪馬

朝野群載巻二献供物於北野廟敬白献上 取要色紙繪馬二疋 中畧 寛弘九年六月廿五日○宣胤卿記永正十七年十一月九日云々繪馬二枚進○本朝文粋巻十三北野天神供御幣并種々物文中原長国献上 大江匡衡 色紙繪馬三疋寛弘九年六月廿五日○夫木廿四 家隆 まそ申して云々

此ゑハ天王寺繪堂ゑ遍和尚つくりてうしろの障子に

三言

ゑゝあく

今昔廿九 廿九 女ノ喘々キテ走ルヲ見テ○同廿五 同 走り喘々キテ来タリケレハ○

繪堂 エダウ

壬二下 天王寺繪堂ハ大師のつくりてあるて後云々

ゑんさ 圓座

あ河ゑんさ たえゑんさ

中務日記きぬのうへにゑんさをしきて関白大臣のハあ河ゑんさをかの公卿のはうはゑんさ也○

四言

ゑりく

今昔廿四大キナル骨浄覚カ喉ニ立テヱツヽトヽ吐逆（迷ヒ）シケル程ニ骨不出ケレハ遂ニ死ニケリ○

ゑふくろ

東涼第二十八○金葉雑上男のんうもりてゝゝ○第花律々別十一ウ○宇治拾遺吹上中もゐかゝきゝゝゝゝゝ

ゑふくろ○今昔廿六条餌袋ニ干飯ヲ入テ堅キ塩和布ナト具ソ○同同十三条餌袋ニ菓子ナトヽ入テ持諳タリ○同廿七十三大ナル餌袋ニ交菓子ヲ鉉ト等シク調入テ○同廿八ノ一餌袋破子酒ナトモタヒ○宇治拾遺上回議

えれゑりゑふくろ○同荒用

ゑふくろ川ゝ白張の淺一ゑふくろ

はしのもにしてかしてつ一ゑふくろ○

ゑふくろしてゝ○同同

えぼし 烏帽子

太平記十三 竜馬進奏 細烏帽子

山家集 志のゝめてさらあらとのゝいはてひえぼしのはけれぬ

○増鏡 月草の花 内大臣殿は烏帽子の別当通季こそ

中略 別当は道のはしみさうれけれに打烏帽子に

ぬのかりきぬとふ ○枕冊子 十七 長烏帽

しておほかた人にこえしたかひ出るほと

えぼしき 笑ヘレキニテ人ノ愛敬アルサマニイヘリ

菜花とそてぬ箋 いまめかしうえぼしきてあるきぬ

えみし

今物語 十六 神をとりきあつまりてえみしをこなひて○

源 柏木 あいきやうつきぬるみのうちとりてえみまけ

と○ エミカチセ小児ノサマナリ ○同 宿木 女ごしのあのふところに

いつきさしてえみまろかしみ○

六言

えりはみ入

今昔廿四 廿二 女房共皆エツボニ入ニケリ○盛

裏記卅四大名小名奥ニ入テエツホノ會也○

う後拾遺十九 土 あら人皆かしこきところにゑつほか

のにけり○

エヒナキ

ゑひさかなる　沈酒（エヒサカタル）　武烈紀

後拾雜四 はつものくさにゑひさまされくるうなか

きよきる所を○榮花 たけ河花 ゑひなき○源 若菜 下 ゑひ

ひなき○今昔廿八 四 一 人直キ者モ无ク醉様

垂テ○大和物語 百四十九 人つゝもゑひくるほとにてゑひ

なきいふにけく○源 蓬のうへ 皆ゑひなけて○

七言

ゑらんのあさき　未詳

拾玉四 四十ウ

ゑにうき嫉ほし

大鏡一 ゑうりうほくゑらみちつきゑにうきほし

くるゆ

火丨
水菜丨
腰丨
火丨
耳丨
足丨

との部

二言

某桶

和名桶 辛計 俗有火丨水菜丨腰丨等之名 ○宇川保 国譲上 く

ろきぬ桶のかはきやかかよ川 ○ 類聚雑要 一ウ十三

搗粉粥三斗白粉 耳桶足桶 納之 一口 又

とお

古事記應神天皇御歌 美豆多麻流余佐美能

伊気能章具比宇知比斯賀良能佐斯祁流斯良

迩奴那波久理波同祁久斯良迩和賀許々呂志
叙伊夜袁許迩斯豆伊麻叙久夜斯岐○紀作于
古○三代実録卌八右近衛内藏冨継長尾末継
伎善散楽令人大咲所謂嗚呼人近之矣○印本
嗚許トアリ古本ニヨリテ引リ○西宮記ニ
ハ所謂ノ二字ナシ嗚呼者也トアリ○傳ニ云
書紀ノ千古ノアル注ニ釈紀ニ尾籠（ヲコ）也トアル
ハ借字ナルヲ後世ソノ字音ニツキテヒロウ
ト云詞ニ依テ説ツイフハイミシキヒカコト
ナリ○帰命本願抄人ハタヽカヘスヽモヲコ

ノケナリ○袋中子云芽善有嗚呼気人也○今
昔廿八 廿六 今ハムカシヒエノ山ノ無動寺ニ義
清阿闍梨トイヒシ僧有キ 略 此阿闍梨ハ嗚呼
繪ハ華ツキハ□ニ書ケレ𪜈其レハ皆嗚呼
繪ノ気色死シ此阿闍梨ノ書タルハタヽテタル
ヤウナレ𪜈タヾ一筆ニカキタルニコヽチノ
エナラス見エテヲカシキコトカキリナシ○
盛衰記四十二人々嗚呼々々数思ヒケル○今
昔廿八 廿六 腰屈テ嗚呼付テナム有シ

とち

万代夏　前摂政左大臣

みちのくのいはてしのふもおもはくやとちは咲藤の花

とち　以前ヲ云

拾遺雑賀　よみ人

きのふまてとちをひろひし百とせの春のためしにあへるなりけり

貫之集同

とを　尾羽

金雑上　よみ人しらす

みのおのまさかひかけるあしもせてとをとるものはおもひせさらまし

○これか尾羽ニ伯

毋ニヨセタリ

為忠後百　新政

郭公なき卯花のあきかきしとを手ぬらしうきそ宮所

○

とを　浪とふ

万七

いもかもかきつもいはしねめやへをとろへはみてむれやまん

○万廿　長歌　白浪の八重をりかへ○

とく

紀

○源　夏　とくとあはらのゆすえみゆり○

山家集下　放生會

みきはしとまる女さきらてくらまかはとをかしに渡る神の禰人

○

三言

とふみ　同見　○その道に出て来年中の吉凶をみるなり

袖中十八　十六　さしひはらを　こゝ傍らの道ひときゝ入て　おき

そりおきてともしろきことねさめすてつきのとし知人はる

あしとみるまのまつかしあく　いとみれとのや暇来

とふまとはてつる傍つるかや

堀百　除夜　俊頼

こよひまのおほつかなさにとふみはらは楷かしに年くときらは

散木冬

ときゑ　招　餅

全雑上　櫟井尼

拾遺物名　きりを

新嶋の河まちのときのゑふる縁にをきゑもさそてかつしつるかも

もしぬかりときゑにせん遣へまで部しあひきは縁ぬつきちく

○　招　日本紀

六帖　大たかぬ

へとつけて山につかしおもかのいとときみくきそうてもれせそ

後撰雑三　よみ人しらす

こなたくときみるかうしもしまかの人のみはなかいはなう

夫木六九　久百ろ長歌　待賢門院安芸

衰うき世を捨かして　うつめるとときあちめあう一きらに

○

としふ

新勅秋下頭書要注○君かつし

拾玉一　早苗
小山田のとしふのなへのすくふにゆふ見えのまかひかるかな

とをを

万四 四十 相見者月毛不経尓志云者辛曽呂登吾

辛於毛保寒乃毛○奥義抄云或人云ふりなしの間八

をしはしとふとをとをとふくし○虚言(ウソ)也 辛宇相通

男(ヲトコ)　下男ヲ云

東鑑卅四仁治三年三月廿五日庄田四郎二郎

一行方許申盗人新五郎男(カシコ)事 略 彼男カ主人岩本太

郎家清云云○同五月六日搦取口付(クチツキノヲトリ)二次郎男(ヲトコ)

とらり

和名
余材上引孫姫式

長月のをつらちにとをりかて一日も君をわすれぬ田かれし

とふち　小駁○尾駁

後拾秋上八月駒むかへと　良暹法師
あふ坂のせきの杉むらひくとくそとふちにみゆるもち月の駒

四言

といし　唯、

菊花（月宴）といしきれしくものかげし○源（玉かつら）

といさうくしうれつまて○監ノ詞也○今昔廿五　土守

ヨイ然ルニテハ其刀ヲ抜ヨ○濱（宿木）といやな

しんのしま○オノカナナルヘシ

とけもち

古老口實傳　掃餅　柏付也○

とさし　百十四　幹了

○河海　引躬恒假名序曰わらしのとさし

しけきしハとわらしく住ゐこめり○枕冊子（見ゆめの条）とき

くしくのりそうらく（カトナシキ意ニ用ユ）○遊士日記　上巻

の人ら　とさしきやしにもきけえ人ちをらめ

して○古今長哥

とまあき

そよさもしは ふゝき荻より おひ出て
うちそよぐ荻の音けうちに そのふりをちらまじき枝
中略
さしわたりてふしけむに尋ねてらぬなさせかへる
若あかこもりて清きゝ流れやまふのそてかなる
僻案抄云 古今
おく山にたつ川とも清きの中なるほとみけて時のまをなき
○ともしきのみなとのみちをのこりや
夫木第九模百首 御歌某所題
ともしきの山すそ川とも清きゝしらへも叶し
同 家集秋部　從二位家隆
つくば山たつ川ともしきの清きて宿の露に
同 百首歌　安嘉門院四条
つくば山しけきめくみのちらましはつたへ清きも花やさきま

同 嘉元二年竹園千首御会家模歌　参議為相
○
こゝ纔もほそてうちんおく山にたつ川とも清きの声ありは

ともしき

佛足名哥　乎遅奈佐夜和礼尓於止礼留比止
乎於保美○竹取 ともしきうつふなく人もあるを
○古事記 清寧 袁遅那美許曽○続紀所詔先乃
人 彼 謀乎遅奈之我方能 久 部与久謀 天 心得 天宇
止 念 天 ○雄畧紀懦弱 ヲヂナク 又怯 ヲヂナキ ○欽明紀微弱 ヲヂナキ ○古
事記傳 四十三 三十三 拙愚ナル意弱キ意ナトヲ兼久

ルコトハ也○

いこの橋

とかりく　誤

万葉

千載

同詰

続古雑下　土御門院御製

ときはなるこやのふるはいかなる人ならしのちいかもみくさもし

和泉式部集　あの侍ふをとりて出すとて

人やねこちゆきたるに出けるもいこの橋のふみとりけん

又一

あはやあくみるくさるをたかのいこのたしくちわれもそはる

○玉雑二　二条院讃岐

伊奈岡くさる下侍るにさ川

らひあるにうりて鎌倉右大臣にたまへんとてあり

ましたりけるに侍るにほいのとく浙りて給のほり侍るれや

つりもしける　善信法師

そもそものいこの橋のこさえしとみ幸てもたる君か

又一

　　さねさ

朽ぬるいこの橋のたしてかふ侍るともさらしつるた

ナハタバニ嫉ト云

カケタルヤウ也　○

タカノ｜｜｜

トミノ｜｜｜

某のとや歯

新古賀　康資王母

万代のまのと山かけ添えけさ君とそるのうさきいかきりに

同賀　匡房卿

　　つてき

とやうつるもめのと山の玉ミつてみれとひふるもいろいかたそし

玉ノ———
越ノ———
松ノ———
亀ノ———
槙ノ———
みの———

続拾賀　亀山院
万代とちきみの玉山の玉影をうつしてさかゆる御代の池水
○ちみの玉山　丹後　夫木廿山　○越の玉山　信太　夫木廿九椎　○桂
の玉山　続後拾秋下　匡房　右大臣　○
某のとや海　於き
夫木三　行家
玉松の枝にかゝる白雲の玉のとや海くちるさかえとぞ
○堀百首　紀伊
年をへて玉の玉山のあらしさそ○安法
法師集　部よ月をかつ色くいで見るにおしの玉山を見
るにもみちの紅葉かたかさされしてさかゆる
おしの玉山もおほゆの海さしきにほるる見え出しきつれかり
○本朝文粋　　○願　梓那　海きの玉山○同
椎木　同○新古今西　伊勢　みのつ玉山○家集同○
六帖家今ハ　　○実方集小一条殿のもる
うたみつやりたる所を送るつやてもといひるるの玉きい
つるに波のかうる玉山の松もうちミテトテレタルニカ　契云　此哥伊勢ヨリ
大方ノ物ニ見
エ又　哥ナリ
とりえて
万代春下　きねとさかりの松につけて人のをそほとて
よの中の人のえやはをかし花の枝松かふおくるらす

○源玉かつら 梅のとりえてあふらことひちりひらきたい
るか○同 宿木 菊のむらさきのうつろひたるをとりえておひ
たり○枕冊子 段六三 とりきお枝ともむらさきのふし
てむすひつけ○同 四十三段 えひそめのいとちらきさしあわき
に菊のとり枝おとくしくかりみたりて○

とりちらす 外字
方丈記 とりちらつきをえ

とりふし

とりしも
とりちら
とりく

栄花 若月 とりしも中将のうへもわかめのけにいと
しくあやはなせるへいに○

とり雲 折松
於き巳負外上
あさつれにとり松たきてみしらも於のうちそむいき
○源かり火 なかのあたりのふににうら松おくろし
かりねはうにおきて 折松とあるも折松の誤りか契沖いふ ○公事根源
俳名 出雲のなへに大樋にとり雲せきは
新六夕やら 小車のやとの松たやまセるちもるえは日いきにゆり
夫木しと 立松とあれど契沖 ○夫木十九夕○同卅三年
とり松かしいてりをく

五言

とこめきて

源 帚木 君のあたりさゝめきて ○同 総角 ちかきり

にとこめきてつゝ出ならぬわらひして ○同 初子

ちとめきのみかうかしきとこめきならでもきこく

しくとりなしなか

とされども

今物語 とされひまもあるなれて○

とゝろけ 男鄙人鄙ノ鄙之

濱松三 こゝもちかうとときめかしはるなひつる○

とんなもて 女言

とこさら

源 浮舟 なかのとんやてもてみなりあはしくあはれなる

○今昔廿八ニ 音気ハ大キニテ男音也○

六言

とうなるの末

古今物名　をか玉の木

○檉　ヲカタマノキ　出所可考

後嵯峨法皇御製
あふち日影にゐる白雪や夕川をかたまの花とさかん

通証
玉かしはとりもちいつるみちのくに神のひもろきをそなへつるかな

○東雅説　此歌日本紀竟宴歌にあり

とこつまさと

賀茂保憲女集　とこつまさとにかるゝことをとくあらけ
ふりせんあらは

六帖　あひきつ
あさくのとこつまさとのあやふさにうけひくことのかたくもあるか

○誘　ヲコツル　ワカツル　紀　○源氏ニ明君あそたちしをこつり
やすえなひく　○今云カラカフ意ナリ　○源夕霧

男聖　ヲトコヒジリ

盛衰記四十四夫妻ニ縁ナキ身也今ハ男聖ノ
二人ノ者ヲ育ニスルハ○

とのゝはち

四季詩　三月　小野小町ハ世ふしきをそひてさそふみあり
て人の国ゝてもわらしくわらしうすく　○つまし

ときはのう田　尾花の郷

康富記文安五年八月一日三之今日尾花之郷

事其由来何事哉自然見及欲之由令問之給了

見及未知其子細候由返答　玉勝間○

女使

金葉賀　按政太臣中将にて侍りける時春日祭の

使にくだりけるに周防内侍女使にてくだりけるに○

紫花　紫野　女使の内侍ほしうる○源　雅兼　賀茂祭女使

七言

とうとの男

水鏡上　とうとの男きうきうるきし計ありのとんれ○

九言

小車のほしきう　今俗午車トテ小児ヲナクサムル是也

さのひ孫上　なにとれきかうそ小車のほしきうとて

○東鑑卅六寛元三年八月廿日今日自二條殿

被進小車御覧翫卿如休御幸苦○　将軍頼嗣公今年七歳御不例

ゑゟさんな

ハヲリ
ノナ也。

尾花のたもとは
宇津保 菊宴 尾花たもとはありける侍るほとに。

十三言

とありて見えて侍つるかな
源 若菜上 十三 ちさき女ありしハおかしもしらるありける事も多かり
はかなきかなしき。○同 竹川 めにもつきうるにて
うきてまつはあけおりそこのみ。○宇津保 印和松上 古沖津白

浪 うき君を女になしてとかく侍はしくさありけれは新女
になしてもうちまかしくありけり。○源 紅葉賀 女ふ
てうんハおかしうるへしく思ひ見えありかにも 是ハ源ノ心ニ無新ヲ女ニミテ見タキトノ心ナリ ○同 同 舞となりとハおほ
しうして女にてうちやくみえまうける侍なるハおほ
はし。○同 法合 ねんの侍ありきかハ女にて見えてまつ
侍はしきと○同 ちかき
○同 榊 女にて見ありける侍はしうきらうへ 是ハ益壷ノ心ニ春宮ヲ冷泉ニシカリ思フナレハ女ニシテ向ンヌナリ ○同 総角 女ならハ必う
つまありんとおもかけしうるねんありうもにおほしける。○

狭衣四下　廿五オ　うちそよぎてかきなふよつきなさに

そせまほしき○菜花　衣珠廿七　人のさそふらんにや

増しくもとの油なしけるべきもあらずや○